

関西大学山岡塾 2022年度最終報告会 各チームの活動報告の概要

チーム①



岸本 浩一智(経済学部2年次生)
吉川 詩乃(商学部1年次生)
西口 祐歳(社会学部4年次生)
三林 美遊(社会学部3年次生)
村田 晴紀(総合情報学部2年次生)

- ・メンバーの興味・関心が最も高かった「中食業界のフードロス」を社会的課題に設定した。
- ・現場取材を複数回行い、飲食業界の根本的な構造問題を考察した結果、フードロス問題を解決するための“アプリ”を開発することになった。
- ・しかし、アプリ制作を進めるうちに、アプリ内の登録店舗数が少ないとユーザーは満足せず、またユーザー数が増えないと店舗側の満足度も低下するという問題が浮上した。
そこで、ユーザー数の増加の方策に加え、そもそも最善の解決手段がアプリなのかも併せて繰り返し議論した。
- ・その結果、アプリ開発の前に、まずは“自分たちが実際に動いてフードロス削減に取り組もう”という結論に至った。
そこで、高槻市内の有志のパン屋の売れ残り商品を買取り、廃棄予定のパンを駅前で販売する計画を立てた。
- ・パン屋への参加呼びかけをはじめ、間借り店舗の確保、保健所や弁護士との安全チェックなど、各方面との最終調整を経て、3/15～4/12の期間に水・金曜日20時から22時まで、高槻松坂屋1階の中央エントランス前で「名前のないパン屋さん」をオープンすることが報告された。

チーム②



金子 京平(環境都市工学部3年次生)
中尾 もも(社会学部3年次生)
船津 杏奈(社会学部3年次生)
八木 真里奈(外国語学部3年次生)
山上 裕梨奈(社会学部3年次生)

- ・メンバーの経験から、新型コロナウイルス感染症(以下「コロナ」という。)の影響で、ダンスサークルにおける交流の機会が失われているという課題認識を持っていた。
- ・その課題認識に基づき、複数の大学が集うサークル連盟へのインタビューやダンス部員へのアンケートを実施した結果、コロナの流行前から一部の者を除き、満足な交流をできていなかった事実が判明し、インタビューやアンケートで得られたニーズ等を分析し、交流のプラットフォームとなる“アプリ開発”が最善の解決手段であるとの結論に至った。
- ・そこで、活動メンバーのうち1名が独学でアプリ制作の技術を習得し、交流機会を増やす(ダンスの練習相手を探す)独自アプリを開発した。
- ・開発後は複数のダンス部員に試験的に操作してもらい、フィードバックを受けながら、オーディション情報の発信や動画投稿など、新たなアイデアの種を得た。
- ・今後の課題として、ユーザー層の拡大や継続的に利用してもらえる仕組みを構築するといった、持続可能性の向上が挙げられた。

関西大学山岡塾 2022年度最終報告会 各チームの活動概要

チーム③



仲田 翔(文学部4年次生)
浜辺 裕多(社会学部3年次生)
広瀬 明穂(社会学部2年次生)
前田 篤孝(社会学部3年次生)
真砂 伽也子(文学部4年次生)
三木 太陽(システム理工学部4年次生)

- ・近年注目を浴びている「メタバース」を用いて、社会的課題の解決を図ることが決まった。
- ・課題設定にあたっては、メタバースの特性である「現実とデジタルの世界で垣根のない体験ができる」「時間や場所を選ばない」点を活かす具体策について数カ月にわたり議論した。その結果、メタバースを用いて「関大の魅力を発信したい」という方向性を確認した。
- ・そこで、2022年度オープンキャンパス(以下「OC」という。)のアンケート結果を調査したところ、OCの不参加理由で最も多かったのは「遠方のため」であったことや、来場者の92.7%が関西圏からであることが判明。これを裏付けに、土地的・経済的問題を解決し、実際の訪問が難しくてもリアルに大学を体感できるようにするためのメタバース空間のOCの制作を開始した。
- ・メタバース空間では、「関大生の1日紹介」と国際性のアピールとして「留学経験者との留学相談会」の2つを企画し、学内関係者との交渉を進めた。また、集客方法においてもTwitterやInstagram、Webサイトの作成に加え、大学の広報を通したPRができないか、精力的に教職員との交渉を進めた。
- ・最終的な成果として、実際に3月26日にメタバースオープンキャンパスを実施した。

チーム④



石田 愛(第一高等学校2年生)
緒方 千瑛(社会学部3年次生)
加藤 駿(システム理工学部4年次生)
久木山 航洋(理工学研究科2年次生)
西村 優里(商学部4年次生)
原 侑也(社会学部2年次生)

- ・メンバーに高校生が含まれていることもあり、高校から大学までの教育環境において、どのような力が不足して(必要とされて)いるかに焦点を当て、議論を重ねた結果、「主体的に行動する高校生が少ない」ことを社会的課題として設定することになった。
- ・実態調査によると、85%の高校でアクティブラーニングに取り組んでいるものの、計画や目標を立てて実施している割合が低いことを確認した。そこで、主体的に考え、行動する高校生を増やす新たな仕掛けとして、Meta Class (Metaverse(メタバース)とClass(授業)を重ねた造語)というアプリを開発する結論に至った。
- ・アプリでは、学生時代より主体的な活動をされている人をメンバーが取材し、活動内容を記事や動画にまとめて掲載。その記事を見た高校生が、アプリ内で自由に意見・疑問を発信し、発信者同士で活発な議論を促進させる仕組みとなっている。
- ・主体性を育むアプリとして認知度が高まり、一定数のユーザーが確保できた場合のビジネスモデル(高校生がアイデアを提供。そのアイデアに賛同した企業があれば、高校生と企業をコネクトし、賛同した企業が協賛費としてアイデアの使用料をMeta Classに支払う仕組み)も発表された。

関西大学山岡塾 2022年度最終報告会 各チームの活動概要

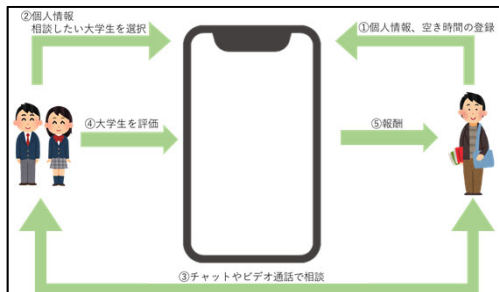
チーム⑤



赤木 真奈(社会学部3年次生)
袖谷 明日香(社会学部3年次生)
中西 一心(法学部1年次生)
山岸 歩佑菜(社会学部3年次生)

- ・メンバーのなかに「中小企業で働く親から“すぐ人が辞めるので困っていることを聞いた者」「授業で日本の中小企業に関する話を聞き関心のある者」がいたことから、中小企業が抱える課題を見つけ出して解決することが確認された。
- ・課題解決にあたり、中小企業の技術は優れているのに売り出し切れていないイメージや、日本の文化を守りたいというメンバーの想いから、「日本を元気に」というビジョンを掲げ、異なる業種6社に調査を行った。その結果、人材不足・労働力の減少という課題を抱えていることが洗い出された。
- ・そこで、課題を解決する具体策として、入社後のミスマッチによる離職を防ぐための動画制作を行うという結論に至った。
- ・動画制作先の一つである上田製袋株式会社はBtoB企業であることから、事業内容が理解されにくい点や求める人材像に合う人材の確保が難しい点を課題として挙げたため、会社の理念を知り、魅力を感じてもらうことを狙いとして、制作先の社長や社員からのフィードバック内容を反映させた動画を制作した。
- ・企画から編集まで一貫して制作したことを踏まえ、今後のビジネスモデル構想についても発表された。

チーム⑥



榎田 木々乃(経済学部2年次生)
新木 聖人(外国語学部4年次生)
関根 穂摘(総合情報学部2年次生)
西埜 史真(法学部2年次生)
福島 基矢(政策創造学部2年次生)

- ・「フェアトレードによる商品開発」チームとして発足し、どんな商品をどのような形で販売するのが良いか、数か月の検討を重ねたが、なかなか具体策がまとまらなかった。
- ・改めてメンバーの入塾動機や在りたい自分の姿、解決したい社会的課題を議論したところ、共通項として「異なる価値観や環境を繋ぐ」ことが自身の成長やかけがえのない経験に繋がったことを認識した。
- ・「大学生」という立場を認識し、そのアプローチ方法を模索したところ、「高校生の思い描く『理想の大学生』になるサポート」を行うサービスとしてオンライン(アプリまたはウェブサイト)で大学生と高校生を繋ぐ事業の検討を開始するという結論に至った。
- ・そこで、先行事例調査や高校生、大学生へのオンラインアンケートを実施し、ニーズ及び事業計画の検証を行った。その結果、大学生がプロフィールや相談可能日時を設定し、ユーザー(高校生)は登録情報を元に相談したい大学生を決定。相談終了後は大学生が一定の報酬を受け取れるサービスを考案した。
- ・今後の課題として、大学生へ支払う報酬の財源確保や利用における安全面の担保、認知度を高めるための広報手段、大学生との対話以外の追加コンテンツ作成などが挙げられた。